



井伊家と喜多流の縁——四代直興による能役者召し抱え——

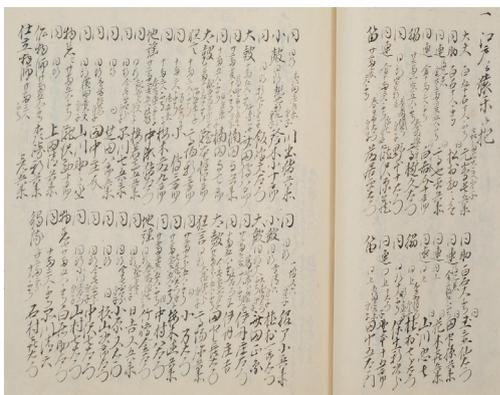
幕府が能を式楽（儀式の際に行う楽舞）と定めた江戸時代、全国の諸藩と同様に、彦根藩井伊家も能役者を召し抱え、さまざまな儀式や行事で盛んに能を催しました。

井伊家において最初に能役者を召し抱えたとみられるのは、四代直興（二六五六〜一七一七）です。貞享三年（一六八六）、五十五人の役者を一斉に雇い入れました（「井伊年譜」彦根市立図書館蔵、写真）。この内、演能の中心的役割を担うシテとそれに連れ添う役であるツレとして召し抱えられたのが、喜多流宗家・三世宗能の兄弟とみられる元嶋長兵衛、宗能の弟子である玉置仙右衛門、松村勘之介等の喜多流の役者です。

直興はなぜ、この時これらの役者を召し抱えたのでしょうか。そこには、直興が政治を補佐した五代將軍綱吉がもたらした、当時の能界の混乱が関係しているとみられます。

綱吉は、歴代將軍の中でも類を見ないほど能に熱狂した人物です。江戸城で私的な能を頻繁に催し、自ら

演じるだけでなく、側近や諸大名にも能を舞うことを強制しました。さらには、自分が愛好する宝生流に他流の役者を移籍させたほか、自らの能の相手をさせるため、気に入った役者を武士の身分に取り立て、江戸城に仕えさせました。武士となることは能役者の廃業を意味します。中には当主が召し出され、適当な後継者がなかったため断絶した家や流儀もありました。



写真「井伊年譜」巻九（部分、彦根市立蔵図書館）

とりわけ能界を震撼させた出来事が、貞享三年二月五日の喜多宗能と継嗣梅能の追放です。これは宗能が武士への取り立てを辞退したことによるもので、一人は鎌倉へと蟄居し、喜多座は解散となりました。幸い約一年後に赦免され、喜多座は旧に復しますが、宗能は宗家を退き、武士として綱吉に仕えることになりました。

直興が能役者を召し抱えた目的は、もちろん井伊家での演能でした。幕府の大工頭をつとめた鈴木長常・長頼父子が記した「鈴木修理日記」（東京都立図書館蔵）には、元禄元年（一六八八）から十二年にかけて、直興が江戸で三十回を超える能を催していたことが記録されています。これらには、井伊家お抱えの役者が出演するとともに、宗能から宗家を継いだ四世梅能も度々出勤しています。時には、直興が「高砂」などを演じることもありました。

加えて注目されるのは、直興による宗能の親類・元嶋長兵衛などの召

し抱えが、喜多座の解散と同年に行われている点です。直興が綱吉の政治を補佐する立場にあったことを鑑みるなら、この召し抱えは、井伊家の演能を充実するだけに留まらず、幕府の式楽の担い手でありながら、所属する座を失ってしまった能役者を保護するためのものであったと考えられます。あるいは、綱吉の専横による能界の混乱を軽減することも意識されていたのかもしれない。

元禄十四年（一七〇二）、直興の隠居に伴い、井伊家の能役者は一部を除きほぼ全員が解雇となりました。たとえ一時的とはいえ、この召し抱えは、喜多流と縁を結び、後に井伊家に喜多流が深く浸透していく道筋を作った、重要な出来事といえるでしょう。

【彦根城博物館学芸員 茨木恵美】

写真の作品は、テーマ展「井伊家と能——大名文化の精華——」で4月20日（日）まで展示します（期間中無休）。